

平成 22 年 4 月 9 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520594

研究課題名（和文）京都における伝統工芸の成立と発展、近現代窯業の考古学的研究

研究課題名（英文）Formation and the development of the folk craft in Kyoto.
An archeological study of modern ceramics.

研究代表者

木立雅朗（KIDACHI MASAOKI）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40278487

研究成果の概要（和文）：京都の伝統工芸について民俗調査・考古学的調査を行った。戦時中の信楽焼の陶器製地雷について聞き取り調査と現地踏査、京焼関連の近代資料の調査、桐箱製造業者の聞き取り調査、和鏡製造業社の聞き取り調査と近代資料の調査などを行った。また現代窯業遺跡の発掘調査と民俗調査を行い、近現代考古学の方法論を模索した。調査した伝統工芸は、アジア太平洋戦争において積極的な役割を果たし、それが戦後復興にも反映していることを確認した。

研究成果の概要（英文）：I performed investigation of folk investigation and the archeology about a folk craft of Kyoto. I performed the investigation of the document about a mine made by the ceramics of the wartime Shigaraki ware in hearing investigation and a local survey, the investigation of the Kyoto ceramic ware-related modern document, the hearing investigation of the paulownia box manufacturer, hearing investigation and modern times of sum mirror manufacturing industry Corporation. In addition, I performed excavation and the folk investigation of modern ceramics remains and groped for methodology of Modern archeology. I played a positive role in the Asian Pacific Wars, and the folk craft which I investigated confirmed that it reflected it for a postwar reconstruction.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,300,000		1,300,000
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	600,000	3,900,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：京焼、和鏡、窯業、伝統工芸、近現代、戦争、民俗考古学

1. 研究開始当初の背景

- (1) 近現代考古学の現状と意義
近年、近現代考古学・戦跡考古学が研究さ

れるようになったが、まだ日が浅く、学問体系として十分に整っているとは言えない。しかし、近現代は考古学の方法論を錬磨し、長

い時代の通史的検討を行うためには鍵になる重要な時代である。

(2) 特権化した京都研究

伝統工芸の研究は、美術史的観点から進められてきた。そのため、産業史としての位置付けが弱くなっている。しかし、その多くは「日本に京都があってよかった」というキャッチ・フレーズに違わず、特権化した京都を描き出すことが目的になっていることが多い。近代という「戦争の時代」と京都の伝統工芸との関係、社会との密接な関わりについても等閑視されることが多い。

2. 研究の目的

(1) 考古学研究の錬磨

本研究の目的は、近現代考古学の基礎的方法論を錬磨するため、京焼やそれに関連した複数の伝統工芸群を総合的に検討することである。これによって考古学的視野を大きく広げ、歴史研究としての考古学や近現代史の枠組みを再検討することも視野に入れた。

(2) 京都における伝統工芸の相対化

特権化されたイメージから自由になり、相対化するために、京都やその伝統工芸と戦争との関わりについても検討する。いわゆる「伝統」や「工芸」がもつ一般的イメージを現代、伝統工芸に直接携わっている方々から聞き取り調査することで、一般的イメージと実態の齟齬を明らかにする。

3. 研究の方法

伝統的な考古学の手法を生かしながら、聞き取り調査（オーラル・ヒストリー）と民具調査、さらに従来重視されてこなかった近現代文書の調査・検討を進める。両者の融合を古代や中世以上に濃厚に進めることが可能であり、「もの」が語る歴史的意味を再検討する。

4. 研究成果

本研究は、次の6つ構成で成り立っている。

- ①信楽焼陶器製地雷について－聞き取り調査と研究ノート
- ②京焼・清水焼と近現代の考古学－仁清・乾山から陶器製手榴弾まで－
- ③五条坂の桐箱製造業－山本和夫氏の聞き取り調査－
- ④五条坂・藤平陶芸の民俗考古学－近現代資料と民芸陶器－
- ⑤京都の和鏡－山本合金製作所の近現代文書と聞き取り調査
- ⑥近現代都市・京都の窯業生産遺跡の調査・保存・活用・整備－五条坂・道仙化学製陶所窯跡の発掘調査と民俗考古学的手法－

(1) 信楽焼陶器製地雷について

信楽焼陶器製地雷の製造に係わる聞き取り調査を実施し、その成果をまとめた。信楽町神山の国富産業有限会社において、終戦末期に製作された陶器製地雷についてはじめて本格的な聞き取り調査・現地踏査を行った。信楽町神山は信楽焼汽車土瓶の産地としても著名である。近年の信楽焼汽車土瓶の研究によると、戦前にはかたくなに手回し轆轤に



国富産業有限会社で製造された陶器製地雷

よる成形にこだわっていた信楽では、戦後になって機械轆轤に転換したという。汽車土瓶・茶瓶の他の産地と比べると技法の転換が遅れているが、その遅れを多少なりとも変換させた契機として、終戦末期に作られた陶器製地雷・陶器製手榴弾薬匣の製造があったと想定される。戦時中には軍と協力してそれらの生産に当たり、信楽や丹波では組合まで結成して地元を上げた協力体制を作り上げた。それは単なる協力ではなく、軍からの見返りとして、材料や人材などの供給があったはずである。その中に、成形技法の転換も含まれていた可能性がある。

(2) 京焼・清水焼と近現代の考古学

ここでは京焼の歴史について、はじまりから戦時中までを含めて概観することで、従来の美術史中心の見方から離れた産業史・地域史として認識しなおそうとした。京焼は織豊政権期に内窯の楽焼から発展して、江戸時代前期のうちに連房式登り窯を使用した粟田口焼、五条坂焼(音羽焼)などに発展する。そして仁清・乾山という二大スーパースターの時代に「古清水」と言われる無銘の京焼も作られ、新しい展開をとげる。さらに奥田穎川や欽古堂亀佑など、名だたる「名工」たちの華々しい焼き物が作られ続ける。しかし、楽焼をはじめとする古い京焼は廃れず、未だに健在である。京焼は大きく変化したが、それによって古いものを無くすことをせず、重ね着するように新しい意匠を加え続けてきた。その流れは現在にも続いており、極めて多様

な焼き物としての「京焼・清水焼」に繋がっている。中ノ堂一信氏は「名工の焼き物」と呼び、多様な京焼の側面を「名工」によって説明している。京焼ほど、陶工の名前が残されたものではなく、「名工」たちが単なる陶工ではなく、文人として活躍した名を残すべき人々であったため、京焼の特徴を示したすぐれた呼称であろう。ただし、従来の説明のなかには京焼を特権化するあまり、資料批判が不十分な側面もあった。たとえば、「乾山焼」の説明として「京都の乾の山」という説明が批判されずに通用されているが、京都の伝統的な呼称としては「東西南北」以外はあり得ない。鳴滝乾山窯跡の地点は洛西にほかならず、乾山とは周辺的生活言葉などから派生した名称だと考える。また、京焼と戦争との関わりについても十分に検討されることがないが、信楽で見られたのと同じように、軍に協力してさまざまな軍需物資を製造していることを明らかにした。高山耕山・藤平陶芸などでは軍需品を焼成したおかげで戦時中も生産組織を維持することができた。それがなければ、現在につながる「伝統工芸」は戦時中・戦後に途絶えてしまったことだろう。戦時中の軍によるこ入れがあったおかげで、戦争を生き抜き、その財産で戦後復興を果たした可能性が高い。そのことは京焼に限ることではないのだが、一方的な被害や単純に耐える時代だったと説明するわけにはいかないことは明らかである。

(3) 五条坂の桐箱製造業

ここでは、五条坂の桐箱製造業者への聞き取り調査成果を行い、京焼をはじめとする京都の伝統文化の環境について検討した。桐箱は京焼研究にとって「周辺」にすぎないものとして軽視されてきたと思われるが、高級陶磁器である京焼にとって、それに係わる様々な伝統工芸が全体として京焼を支えてきたことは間違いない。ここではそうした意味をこめて、「周辺」から京焼や伝統工芸を支えた職人の在り方について検討した。この聞き取りは、現代窯跡である道仙化学製陶所の発掘調査にあたって、それに関する聞き取り調査を行ううち、拡大したものである。その結果、京焼にとどまらず、寺院をはじめとする桐箱を必要とする伝統的な施設などからの注文も多く、焼き物が下火になった現在でも生産を継続することができたこと、京都の職人の手仕事のこだわりと関係者の評価の高さを知ることができた。安い桐箱が京都以外で作られて持ち込まれている現状、跡継ぎが極めて少ないなど、厳しい現状も明らかにすることができた。京焼が伝統産業として保存・育成されたとしても、その保管容器であり、「格を上げる」と言われる桐箱をはじめとする周辺産業が衰退してしまっただろう。京焼

の衰退にも係わらず、現状を維持できているのは寺院をはじめとする京焼以外の伝統文化の支えに違いない。京焼も伝統工芸のなかの一つにすぎないこと、伝統工芸全体を見通さなければならないことが理解される。

(4) 五条坂・藤平陶芸の民俗考古学

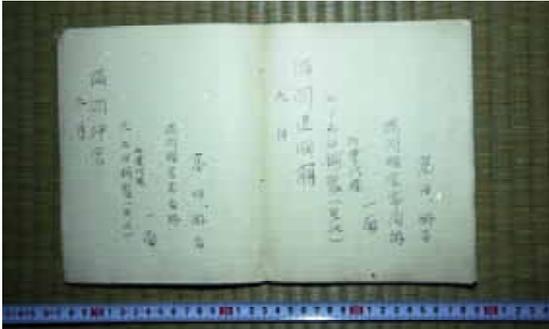
ここでは五条坂・藤平陶芸に係わる民芸陶器の収集と近現代文書の調査を行った。藤平陶芸には戦時中に河井寛次郎が勤めており、戦後もその指導を受けながら民芸陶器を製作していた。寛次郎の甥が社員として残っており、「町の民芸」を作ったことで京焼窯元としては特殊であり、注目される。民芸研究には著名な民芸作家の研究は盛んだが、それらが実態としてどのように民間に影響を与えたのか、河井寛次郎らの指導がどのように実践され、一般社会に流通した「民芸陶器」がどのようなものであったのか、ほとんど研究されていない。しかし、藤平陶芸は確かな資料や伝承が残っており、新しい民芸研究を行う上で重要である。ここでは基礎資料を収集した。

また、戦時中、戦後におよぶ古い資料類の検討も行ったが、戦時中に河井寛次郎が出勤していた様子を示す出勤簿や、いわゆる会社統制法によって整理・統合された会社の実態を知ることができた。藤平陶芸に周囲の窯元が整理・統合されたこと、その出資の割合など詳細な記録を含んだ、京都府知事に対する申請書を整理・検討できた。基礎段階であるとは言え、京焼窯元の戦時中の状態を知るうえで貴重な成果であった。

(5) 京都の和鏡

ここでは、京都でもっとも古い「伝統工芸」である和鏡を製造する山本合金製作所の聞き取りを行い、あわせて戦前の鏡作りに関連した資料を収集した。山本合金製作所では伝統技法を伝えるため、跡取りに対する対応など、さまざまな工夫を行っている。また、ここでも戦時中におかれた伝統工芸の状況を知る貴重な資料をえることができたし、それに反して戦後の苦境についても知ることができた。先代が記録した『役所御用鏡』は戦前に山本合金が製造した鏡の発注元や納入先が記録されている。戦時中は日本各地の神社に限らず、南洋神社や満州神宮などの海外神社の御神体や御神宝などの鑄造も行っており、鏡の鑄造で手一杯だったという。軍需産業への誘いもあり、それによって会社を大きくできることを知ってはいても、鏡作りの技術を伝承することに精力を傾けた。しかし、それゆえ、戦後には一息に鏡の注文がなくなり、伝統技法を維持するために仏具作りに主体を移して現在に至っている。山本合金の和鏡作りは伝統工芸として高く評価されるとともに、神社神道にとって欠かせないアイテムである。先代の山本真治氏によると、現在

使用している道具の中に、すでに生産者が途絶え、追加できないものがあるという。多くの伝統工芸の多くは、道具の部分からも崩壊している。山本合金もその例にもれないし、もし、伝統的な和鏡が途絶えるならば、神社神道をはじめとする多くの「伝統」がアイテムの質的変更を余儀なくさせる。「伝統工芸」を支えるもの、「伝統工芸が支えるもの」の関係の深さも、和鏡を中心に明らかにすることができた。



『役所御用鏡』の一部（満州国への鏡）

(6) 近現代都市・京都の窯業生産遺跡の調査・保存・活用・整備

ここでは、(1)～(5)に係わる京都の伝統工芸や近現代遺跡について、その調査経験から保存と活用方法について考えた。京都の歴史のなかで、平安京より後の歴史は軽視されがちだが、幕末以後の歴史はさらに評価が低い。脈絡のある歴史を重視する立場にたつならば、近世以降、とくに近現代の歴史は無視できない。この時代の文化財と言え、通常は建造物や美術品に限定されるが、「埋蔵文化財」も決してそれらに劣ることのない情報量や歴史的意義をもっている。京都市五条坂の道仙化学製陶所窯跡は、現代窯跡ではあるが、その発掘調査・整備過程において、聞き取り調査では得られなかった知見を得ることができた。とはいえ、聞き取り調査のおかげで詳細な復原ができたことも間違いない。また、調査を継続して行うことで、地元住民との接触が濃厚になり、(3)・(4)のような調査を深めることができた。近現代遺跡の発掘調査は、それが地域のモニュメントである限り、地元住民の感性を呼び起こす。そうした意味でも発掘調査の成果を上げるためには、通常の考古学的調査とは異なる観点で調査を進める必要がある。「古いこと」や「一番であること」が遺跡や文化財の唯一の価値ではない。そのことは地元住民の立場に立ち、地元の視点で文化遺産を評価すればおのずと理解できることにすぎない。近現代遺跡のなかでも、地域にとって「なにがモニュメントと呼べるのか」という問いも続くが、モニュメント足りうる対象は、住民が対話しながら価値づけている側面がある。なお、五条坂に残る登り窯の保存活用計画が本研究中からはじまり、現在運動が続いている。京焼関係者らの好意的な見

方に対して、かつて煙害に苦しんだ地元町内会からも懸念が表明されるなど、伝統工芸の「モニュメント」といえども、実に多様な在り方を示している。そうした「多様性のあるモニュメント」の活用にあたっては、本研究の成果をいかすことが可能であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

①木立雅朗2007「窯壁と窯構造-京都府篠窯跡群三軒屋支群の分布調査から考える-」『窯跡研究』第2号、窯跡研究会、61-66頁

②一島政勝・木立雅朗2007「奈良県赤膚焼の登り窯調査報告」『窯跡研究』第2号、窯跡研究会、67-104頁

③木立雅朗2008「須恵器坏類の製作実験ノートーヘラ起こし技法による丸底化と「正円の沈線」をめぐる」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会、377-395頁

④木立雅朗2009「近現代都市・京都の窯業生産遺跡の調査・保存・活用・整備ー五条坂・道仙化学製陶所窯跡の発掘調査と民俗考古学的手法ー」『文化財保存全国協議会第40回記念京都大会 都市遺跡の調査と保存・活用・整備 予稿集』文化財保存全国協議会・文化財保存全国協議会第40回記念京都大会実行委員会、51-57頁

⑤木立雅朗2010「信楽焼陶器製地雷についてー聞き取り調査と研究ノートー」『立命館大学考古学論集』V、立命館大学考古学論集刊行会(2010年5月刊行予定)

〔学会発表〕(計2件)

①木立雅朗「考古学から見た土人形の出現と展開ー偶像・明器・形代・人形の歴史的展開を中心にー」『関西近世考古学研究会第20回大会 土人形がみた近世社会』(於)羽衣国際大学、2008年12月13日

②木立雅朗「近現代都市・京都の窯業生産遺跡の調査・保存・活用・整備ー五条坂・道仙化学製陶所窯跡の発掘調査と民俗考古学的手法ー」『文化財保存全国協議会第40回記念京都大会 都市遺跡の調査と保存・活用・整備』(於)同志社大学今出川キャンパス、2009年6月14日

〔図書〕(計1件)

①木立雅朗・田中聡2010『京都における伝統工芸の成立と展開、近現代窯業の考古学的研究』、科学研究費補助金研究成果報告書

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木立 雅朗 (KIDACHI MASAOKI)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40278487

(2) 研究分担者

田中 聡 (TANAKA SATOSHI)

立命館大学・文学部・講師

研究者番号：10368011